

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	退任にあたり
作成者（著者）	本多,満
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(2). p.56 57.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023 048
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD19260568

退任にあたり

本多 満

東邦大学医療センター大森病院総合診療・急病センター

今まで毎年この時期に、本雑誌で退任される先生の文章を読んできたが、自分の退任の時を迎えて、とうとう自分にもその順番が回ってきたのか、というのが実感です。大学入学より現在に至るまで多くの同級生、先輩、先生方、さらには後輩の医師、医療関係者の皆様に大変お世話になって退任を迎えようとしております。特に、変人の気がある私を大いなる包容力を持って迎え入れてくれた、医学部柔道部、脳神経外科医局そして救命救急センターの皆様には、大変多くのことを教えて頂き、温かく見守って頂き、ご支援、ご協力いただいたことに本当に感謝の念で一杯です。また大森での生活での後半と一緒に仕事をして頂いた救急関連の多職種の皆様本当にありがとうございます。この場で今までの医師・教員としての仕事を振り返ってみたいと思います。

医師としての道のり

1983年3月、東邦大学医学部を卒業後、附属大森病院脳神経外科講座に入局（主任教授：故寺尾榮夫先生）して医師としてのスタートを切りました。あまりよく考えず成り行きでの入局でしたが、大森病院で2年間の研修医を経て、済生会横浜市南部病院、大森病院脳神経外科での研修を行い、卒後6年目に大森病院の救命救急センターに院内出張してから救急医療との接点を持ちました。その後、寺尾榮夫先生が東邦大学を退任後に院長となられた西横浜国際総合病院に、脳神経外科部長として一緒に赴任した2年3ヶ月を含めた脳神経外科病棟と救命救急センターを歩き来して、それぞれ10年間を過ごしました。救急医療に関しては第二内科の故上嶋権兵衛教授の薫陶を受け、救急医療に触れるにつれて、脳神経外科救急のみでなく神経救急を中心とした救急医療に惹かれて、2003年に救命救急センターが総合診療急病科講座の一部門として独立したため移籍しました。この間、学位論文のテーマである「クモ膜下出血後の脳血管攣縮の機序」を解明しようと、動物実験を試行錯誤しながら医局員と夜中まで行ったことが懐かしく思われます。重症頭部外傷や脳血管障害の緊急手術が好きであったために、救急の方にシフトしていったが、重症であるために手術はうまくいっても転帰は悪く、術後の集中治療の

重要性を痛感して、マルチモダリティによるモニタリングシステム、キセノンCTによる脳血流量評価による治療方針策定、非侵襲的検査である脳波の救急・集中治療領域での活用などの研究を行いました。脳神経外科においては入局時に指導医であった前脳神経外科教授の清木義勝先生をはじめ先輩方から多くの教えを受けられたが、この神経救急は当学においては先達がおらず、自由に診療をさせてもらえたものの孤軍奮闘で試行錯誤の繰り返しであり周囲の先生方には迷惑をかけつつも見守って頂けたことは本当に感謝の念に耐えません。この分野で学会活動を行い、徐々に存在を認知して頂き2017年には日本神経救急学会、2022年には日本脳低温・体温管理学会の会長を任せて頂きました。救命救急センターも、2003年に移籍したときは専従2名であったものの、その一林亮先生と鈴木銀河先生をはじめとして10名を超える入局者を迎えて、幅広い救急医療を展開して、現在も東京城南地区の救急医療の最後の砦として機能しています。

自分自身が救急医療に「遅れてきた青年」であったため、その教育に関しては効率的に学べるシミュレーション教育に2000年に入った頃より取り組み、救急医療の教育コースであるICLS、JPTECやJATECなどのインストラクターとなり、学内での卒前卒後教育にも活用して、現在ICLSは病院内でも認知されて市民権を得ているのも感慨深いものがあります。

救急医学は危機管理制御医学であり、大森病院での患者急変に対する対応としての心肺蘇生の普及を目的とした心肺蘇生委員会の創設および定期的なBLSとICLSの開催、また患者安全を目的として、5年ほど前より安全管理室とRRS(rapid response system)やMET(medical emergency team)の設置及び整備に携わらせて頂きました。さらに大きな危機管理制御として、院内では防災委員会委員長、東京都では大田区品川区の区南部の災害コーディネーター、羽田空港事故医療調整者などの仕事もさせて頂き大変勉強させて頂きました。

このように東邦大学大森病院に長く在籍させて頂いたために多くの仕事をさせて頂き、いろいろな経験を積むこと

が出来ました。しかし、研究・診療においても未だ毎日が未知との遭遇であり、次から次へとわからないことは出てきます。その他の仕事に関しても、どれをとっても完遂したものはなく、まだ道半ばという感は否めません。しかしながら、これらのことを安心して次世代に託して去れるという確信を持っています。

最後に、眼科医院である家業を継承するために東邦大学

に入学したものの、成り行きにまかせて流れ流れて今の場所にたどり着きましたが、今後は学祖である額田晋先生の「自然人間生命」にあるように、自然に対する畏怖の念を持ち、生命に対する尊厳を感じつつ生きていく所存です。

DOI : 10.14994/tohoigaku.2023-048